学会誌掲載論文における文献の記載誤りについて

Mention Errors of Literatures on Papers which appeared on Journals

安 田 圭 子¹ 久保寺 篤² 岩 崎 孝太郎³

林 明 憲⁴ 納 村 晋 吉⁵

日本大学歯学部矯正学教室

Yasuda K. et al : Mention Errors of Literatures on Papers which appeared on Journals.
Igaku Toshokan 1989 ; 36 (3) : 155-159.

The purpose of this study is to investigate the actual situation of mention errors of literatures those are obstruction for smooth search of literature. The material of this investigation is derived from quoted literatures (J.J.O.S., A.J.O., A.O.) which appeared on recent 20 years' J.J.O.S.. The result is as follows.

1. About 281 literatures are quoted in yearly averag and 37.7% of those had some mention errors.

2. The number of quoted literatures and appeared papers had no relevance with that of mention errors.

3. There were more mention errors on Western journals than those on Japaneses one.

4. Mention errors were frequently recognized in title (15.1%), name of author (8.1%) and name of journal (7.4%). Mention errors were found in abstract and subtitle (about 20%) which were not so frequently quoted.

I. 緒 言

国内の医学および歯科学雑誌等に発表される論文および記事数は、年間およそ二十万件といわれており、歯科学に関する論文や記事などだけでも、約一万件におよぶ。とくにここ数年の発表論文数は増加傾向にあり、それらの中から、目的とする文献を探し出すことは大変な時間を要するため、種々の検索手段も生まれてきている。

通常文献を探す場合には、索引誌、抄録誌、あるいは文献集（二次資料）などを利用して、必要とする文献がどんな雑誌に載っているかを調べるのが順序である。したがって、これらの二次資料にはコアジャーナ

ルは勿論であるが、いわゆるマイナージャーナルをも含む網羅性と共に最新の情報が迅速に収録されることが望まれる。国内に関しては、医学中央雑誌刊行会から発行されている医学中央雑誌をはじめ何誌かのものが発行されている。また国外に関しては米国国立医学図書館（NLM）から発行されている Index Medicus、米国歯科医師会（ADA）から発行されている Index to Dental Literature などがあり、前者には世界各国の医学生物分野の雑誌約二千四百誌が収録対象となっており、後者には世界各国の歯科学および関連分野の文献が網羅されている。このような二次資料にそれぞれの文献を追って検索することは相当な時間を要するという背景から最近発展してきたのがオンラインによる情報検索である。これは索引誌、抄録誌などの二次資料をデータベース化してオンラインで検索するシステムであり、その代表的なものには JICST・医中誌国内医学文献ファイル（医学中央雑誌）、MEDLINE（Index Medicus, Index to

¹Keiko YASUDA, ²Atsushi KUBODERA, ³Koutaro IWASAKI, ⁴Ming-hsein LIN, ⁵Shinkichi NAMURA : Department of Orthodontics, Nihon University School of Dentistry. 8-13, 1-chome, Kanda-Surugadai, Chiyoda-ku, Tokyo 101, Japan.

（平成元年7月12日 受理）

Dental Literature), CA SEARCH (Chemical Abstracts), BIOSIS PREVIEWS (Biological Abstracts) などがある¹⁻³⁾。

このように検索手段の発達にはめざましいものがあるにもかかわらず、実際には文献の記載に誤りがあり、検索にかなりの時間がかかることがしばしばある。このような記載誤りは、参照すべき文献が増加傾向にある中で文献検索の効率を低下させ、十分な情報収集を妨げる可能性がある。そのため、記載誤りの傾向やその実態を把握し、誤りを減少させるために一層の注意を払うことが必要であると思われる⁴⁻⁷⁾。

そこで著者は、接する機会の多い日本矯正歯科学会雑誌について記載誤りの調査を行い、いくつかの結果を得たのでここに報告する。

II. 資料および方法

資 料

資料は日本矯正歯科学会雑誌1967年から1986年 (Volume 26-45) までの掲載論文の文献である。そのうち日本矯正歯科学会雑誌, American Journal of Orthodontics, Angle Orthodontist (以降, 日矯歯誌, A.J.O., A.O. と省略する) の3誌から引用しているものを対象に調査を行った。対象となった文献数は日矯歯誌2,571編, A.J.O. 2,075編, A.O. 965編で, 文献総数は5,611編である。

方 法

1. 調査項目

文献の記載誤りの判定基準は, その年に使用されている日矯歯誌の投稿規定および引用された文献の原文とし著者名, 表題, 雑誌名, 巻数, 通巻ページ, 西暦年, コンマ等, 副題, 抄録の引用について調査を行った。ただし副題と抄録の引用については, 引用回数異なるため別個に集計を行った。

2. 検討方法

1) 記載誤りのある文献の割合について

記載誤りのある文献の含まれている割合を誤記率(%)とし以下の方法で検討した。

(1) 文献総数に対する誤記率について

記載誤りのある文献は全体でどの程度含まれているかをみるために, 誤りのある文献数を文献総数で割って誤記率を算出した。

(2) 文献数と誤記率との関係

文献数と誤記率との関係をみるために, 年度ごとに文献数と誤記率を算出しグラフを作成した。

(3) 論文数と誤記率との関係

論文数と誤記率との関係をみるために, 大学および講座(現在日矯歯誌に投稿している歯科大学および矯正学講座を有する医科大学 30校)ごとに論文数と誤記率を算出しグラフを作成した。

(4) 雑誌の種類と誤記率との関係

引用している雑誌(和文雑誌と欧文雑誌)により, 誤記率に差異があるかどうかをみるために, 雑誌別に誤記率を算出した。

2) 記載誤りの箇所について

文献中のどのような箇所に誤りが多いかをみるために誤りのある項目の数をその項目の総数で割って, 調査項目ごとに記載誤りの割合を算出した。

III. 成 績

1) 記載誤りのある文献の割合について

(1) 文献総数に対する誤記率について (図1)

1年間に引用している文献数をみると, 最低は1967年の151編, 最高は1985年の512編で, 平均すると約281編であった。誤記率は, 最も低い年で21.0%, 最も高い年で60.9%, 平均で37.7%であった。

(2) 文献数と誤記率との関係 (図1)

文献数は年々増加しているが, その増加傾向と誤記率との関連性は認められなかった。

(3) 論文数と誤記率との関係 (図2)

30校の誤記率の平均は36.4%で, 大学及び講座別にみた掲載論文数と誤記率との関連性は認められなかった。

(4) 雑誌の種類と誤記率との関係 (表1)

引用している雑誌別の誤記率は第1表のとおりで, 日矯歯誌28.8%, A.J.O. 47.0%, A.O. 41.1%となっており, 欧文雑誌の誤記率の方が高かった。また, 3誌

図1. 年度別の文献数と誤記率との関係

図2. 大学および講座別の論文数と誤記率との関係

表1. 雑誌別の誤記率

調査項目	誤記率
日 矯 歯 誌	28.8
A. J. O.	47.0
A. O.	41.1
平 均	39.0
単位 (%)	

の平均は39.0%であった。

2) 記載誤りの箇所について (表2)

調査項目別の記載誤りの割合は、高い順に表題 (15.1%), 著者名 (8.1%), 雑誌名 (7.4%), ページ (4.7%), 年 (1.3%), コンマ等 (1.2%), 巻数

(0.9%)となっていた。また抄録の引用は20.5%, 副題は20.1%に記載誤りを認めた。

IV. 総括および検討

日矯歯誌における掲載論文数は、大学の新設などの理由とともに歯科学全般にみられる傾向と同様、増加してきている。また引用文献数においても増加傾向を示しており、1967年において日矯歯誌75編, A.J.O. 49編, A.O. 27編, 合計151編であったものが、1985年では日矯歯誌268編, A.J.O. 164編, A.O. 55編, 合計512編の引用があった。そして参考とすべき文献の数はさらに増加し続けると考えられる。

このような状況の中で目的とする文献を短時間に効

表 2. 記載誤りの割合

調 査 項 目	誤 記 率
著 者 名	8.1
表 題	15.1
雑 誌 名	7.4
巻 数	0.9
ペ ー ジ	4.7
年	1.3
コ ン マ 等	1.2
副 題	20.1
抄 録	20.5

単位 (%)

ただし、副題は副題のある文献の総数1,337編、抄録は抄録の引用総数210編、その他の項目は文献総数5,611編を分母として誤記率を求めている。

率よく探し出すことは容易なことではない。そのため最近ではオンラインによる情報検索システムの活用が必要となってきた。しかし、実際には文献の記載に誤りがあり、システムの十分な活用ができないことも考えられ、記載誤りの傾向やその実態を把握し、誤りの多い箇所に対してより一層の注意を払うことが必要であると思われる。

1) 記載誤りのある文献の割合(誤記率)について
記載誤りのある文献の含まれている割合は、平均37.7%でほぼ3編に1編は誤っている結果となった。今回は著者らが接する機会の多い雑誌を調査の対象としているが、接する機会の少ない雑誌からの検索では、かなりの時間と労力が必要になると思われる。

このような記載誤りのおこる原因について、いくつかの集計操作を行い検討した。まず文献数との関連性を、年度ごとに引用された文献数と誤記率を求め検討したところ、文献数と誤記率とに一定の関連性は認められなかった。つまり引用している文献数が多い年度であってもかならずしも記載誤りの割合は高くなかった。また逆に文献数が少ない年度であっても記載誤りの割合は低くなく、記載誤りのおこる原因は、文献数ではなく注意深い記述や丁寧な見直しなどが不足して

いたためと考えられる。

次に論文数との関連性を、大学および講座ごとに求めた掲載論文数と誤記率を集計し検討したところ、掲載論文数が少なくても多くても誤記率に大きな差はなく、論文数と誤記率とに一定の関連性は認められなかった。このことから、文献数と誤記率との関係に対する考察と同様に、記載誤りの要因はほとんど人為的な見直し操作のミスによると考えられる。

さらに雑誌の種類(和文雑誌、欧文雑誌)によって誤記率に違いがあるかどうかを検討したところ、誤記率は日矯歯誌28.8%, A.J.O. 47.0%, A.O. 41.1%で、欧文雑誌のほうが高い傾向を示しておりタイプライターの打ち間違い(最近ではワードプロセッサのキーの打ち間違い)と文字単位の丁寧な見直しが行われていないことが考えられる。

2) 記載誤りの箇所について

記載誤りの多く認められた箇所は、表題(15.1%), 著者名(8.1%), 雑誌名(7.4%)などであった。表題の誤りを詳しくみると、日矯歯誌においては字・言葉が抜けている、つまり脱字の傾向であり、A.J.O., A.O. においてはスペルが違う、つまり誤字の傾向であった。同様に、著者名の誤りを詳しくみると、日矯歯誌においては人数が違っている場合が多く、A.J.O., A.O. においてはスペルが違っているものが多かった。このように和文雑誌と欧文雑誌とでは誤りの傾向に違いがみられるが、どちらも丁寧な見直しを怠ったためであると考えられる。また雑誌名の誤りも多く、特に欧文雑誌の略誌名がよく理解されていないためと思われる。

また、実際に二次資料やデータベースを利用して文献検索を行う場合には表題や著者名を手がかりとすることも多いため、記載誤りは、特に広範囲からの迅速な検索の障害になると考えられる。そして逆に、時間と労力を費やして文献を探しだしても、記載誤りがあると、似てはいるが少し違うというように目的とする原文であるかどうかを確認できないことも考えられる。

引用回数が異なっている抄録の引用と副題をもつ文献は、それぞれ別個に記載誤りの割合を算出した。その結果、抄録の引用では20.5%、副題には20.1%の記

載誤りが認められた。これは抄録の引用や副題は使用されている頻度が低いため、記載方法がよく理解されていないためではないかと思われる。また日矯歯誌では、とくに副題が記載されていないという誤りが多く、引用する時点で省略または見落としされている場合があると考えられる。

一方、巻数、ページ、年の誤りの割合はそれぞれ0.9%、4.7%、1.3%で、割合は低いものの文献の検索時にとくに問題となる項目なので記載には特に配慮が必要と思われる。

以上のような結果より、記載誤りの要因は、①原文を参照しないで孫引した論文の文献記載をそのまま引用したことによるもの、②文献の注意深い記述や見直しの不足、③投稿規定の確認不足、などが考えられる。たとえば①については、同じ大学や関連する論文のなかに同じ誤りがみつかることがしばしばあったからで、なかには文献の年代が古く直接原文を参照することが困難な場合もあるが、引用文献は直接確認するということが原則であると思われる。また近年、複写機やパーソナルコンピューター、ワードプロセッサーなどが普及し便利になっているにもかかわらず記載の誤りが減少していないのは、資料の増加だけではなく、機器の操作ミスや打ち間違いという新たな要素が加わったことにもよると思われる。人為的、手書きの誤りから機械操作の誤りへとその性質が変遷してきたということで、パソコン、ワープロなどの理解を深めるとともにキーボードの使い方を正確に行うなどの注意も必要となってきたと思われる。

V. 結 論

日本矯正歯科学会雑誌の最近20年間の掲載論文中の文献のうち、日本矯正歯科学会雑誌、American Journal of Orthodontics、Angle Orthodontistの3誌から引用しているものについて記載誤りの調査を行い、以下のような結論を得た。

1. 年平均約281編の文献が引用され、全体の37.7

%の文献になんらかの記載誤りが認められた。

2. 引用文献数および掲載論文数と記載誤りの数とは関連性が認められなかった。

3. 和文雑誌に比べ欧文雑誌に記載誤りが多く認められた。

4. 記載誤りは表題(15.1%)、著者名(8.1%)、雑誌名(7.4%)などの箇所に多く認められた。また引用回数の比較的少ない抄録や副題部分において、約20%の高い割合で記載誤りが認められた。

5. 二次資料やデータベースを利用して広範囲からの情報を収集する場合に、表題や著者名の記載誤りがその障害になることが多く、十分な見直しによって減少させていかなければならないと考えられる。

稿を終わるにあたり、種々のご指導ご助言をいただいた日本大学歯学部図書館 大久保泰雄事務課長に対し深く感謝の意を表します。

文 献

- 1) 井上良邦, 裏田和夫, 大沢 充, 菅 利信, 野添篤毅: 医学文献の採しかた 医学研究者のためのわかりやすいガイド 1983; 第2版, 日本医書出版協会, 東京, 1983: 1-23.
- 2) 笹本光雄: 化学・薬学・生物医学の文献調査法; 第1版, 地人書院, 東京, 1978: 1-12.
- 3) 笹本光雄, 坂本徹明, 黒澤正彦: 化学・薬学・生物医学のオンライン情報検索; 第1版, 地人書院, 東京, 1981: 1-26.
- 4) 杉本宗明: 医学引用文献のことなど; 医学図書館, 1963; 10(5): 133-134.
- 5) 萩谷和義, 上野みどり: 文献複写における書誌データの照合; 医学図書館, 1970; 17(1/2): 55-58.
- 6) 松下収一: 雑誌論文の抜刷利用と書誌の情報-原文到達への可能性の調査-; 第15回医学図書館員研究集会論文集, 1981: 263-266.
- 7) 岩田美和子: 参考文献記述の正誤率; 第13回医学図書館員研究集会論文集, 1979: 251-259.